



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	アメリカ合衆国の野外教育の研究に関する一考察
Author(s)	宮本, 倍幸; 束原, 昌郎
Citation	東京学芸大学紀要 . 第 5 部門 , 芸術・体育, 41: 231-237
Issue Date	1989-10
URL	http://hdl.handle.net/2309/4920
Publisher	
Rights	

アメリカ合衆国の野外教育の研究に関する一考察

宮本 倍幸・東原 昌郎

保健体育学*

(1989年6月10日受理)

1. 序 論

野外活動は、一般に「大自然の中で、または大自然を利用して行なう諸活動の総称」としてとらえられ、その活動は、身体的活動、知的活動、情意的・文化芸術的活動に大別される¹⁾。野外教育は、野外活動を手段とした、各教科の内容にまたがる学際的な教育としてとらえられているため、「自然環境」は他の教科に比較して、野外教育で最も直接的に体験させ得るものと考えることができる。

しかし、今日の日本の野外教育では、自然が豊富な環境へ移動しても、その環境を効果的に利用した教育活動が行なわれていない場合が多く、ある特定の野外活動プログラム、例えば、ハイキング、歌、ゲーム、キャンプ・ファイアー等、ある一定のプログラムを消化しさえすれば結果的に野外教育になるという考え方が根強く残っているとの指摘もある²⁾。

このような日本の野外教育の考え方は、主として第二次世界大戦後に日本が諸外国、特にアメリカから学んだものである。アメリカの野外教育の影響を強く受けた日本の野外教育は、スポーツ振興法の影響等により、野外生活の体験、野外生活技術の習得、体育的活動等、に重きが置かれたまま定着したかに思われる³⁾。

一方、アメリカの野外教育は、戦後の姿そのまま定着してはいない。1950年代には既に、学校の各教科のカリキュラムを充実させる手段として野外教育が強調され、1960年代には、自然資源を有効に利用するための教育プログラムが開発され、また、1960年代後半から1970年代にかけて世界的規模で環境問題が顕在化した時点では、従来の目標にさらに環境問題をも意識した目標を加えてその達成のための努力を始めている。したがってアメリカの野外教育の歴史を追認することによって、日本の野外教育は時代の要請に柔軟に応じるための示唆を得ることができると考えられる。

本研究では、1930年代から1979年までのアメリカの野外教育に関連する博士論文の抄録を対象として、アメリカの野外教育に関する研究の動向を調査・分析し、その結果をそれぞれの時代の社会・教育的背景と照合し、野外教育の歴史と比較・検討することにより、その因果関係を明らかにすることを目的とした。

* 東京学芸大学 (184 小金井市貫井北町 4-1-1)

2. 本 論

2.1 調査方法

調査対象としたアメリカの野外教育に関連する博士論文の抄録は、1973、1978、1983年のそれぞれに同タイトルでAAHPERおよびAAPERDが発行した“RESEARCH IN OUTDOOR EDUCATION: SUMMARIES OF DOCTORAL STUDIES”から収集した⁴⁾⁵⁾⁶⁾。

上記の博士論文抄録集を研究対象として扱うことは、以下の点で有意義であると考えられる。第一に論文の収録数が多いこと、第二に30年以上にわたって継続的に収集されており、歴史的推移の考察が可能であること、第三に野外教育の専門家によって広範にわたる研究の中から選ばれた論文の抄録集であり、信頼度が高いと考えられること、等である。

本研究では、抄録集全3巻の中から、発表年が明らかな抄録のみを研究対象として抽出した。ただし、現時点で1980年代の野外教育について歴史的に捕えることは早計であると考えられるため、1980年以降の抄録については除外した。

以上の手順で抽出した博士論文の抄録について、まず発表年ごとに分類を行なった。

次に、抽出した全抄録の内容を検討し、その結果浮き彫りにされた研究対象として以下の11種類を設定し、対象別の分類を行なった。

- (1) 学校キャンプ：組織キャンプのうち特に公立学校で実施される、いわゆる“school camp”が研究の中心となっているもの。
- (2) 組織キャンプ：学校キャンプ以外の組織キャンプが研究の中心となっているもの。
- (3) 野外教育：宿泊の有無にかかわらず、いわゆる“outdoor education”が研究の中心となっているもの。
- (4) 自然保護教育：“conservation education”が研究の中心となっているもの。
- (5) 野外レクリエーション：“outdoor recreation”が研究の中心となっているもの。
- (6) フィールド・トリップ：博物館見学、校外学習等も含めた“field trip”が研究の中心となっているもの。
- (7) 環境教育：“environmental education”が研究の中心となっているもの。
- (8) 人物：野外教育に関係の深い人物の業績や貢献が研究の中心となっているもの。
- (9) OBS：“Outward Bound School”が研究の中心となっているもの。
- (10) 冒険的教育：OBS以外の“adventure education, experience”が研究の中心となっているもの。
- (11) その他：上記の(1)から(10)にあてはまらないもの。

次に、Volume IIIの巻頭言にしたがって研究内容について以下の5項目を設定し、研究内容別の分類を行なった⁷⁾。

- (1)組織と管理、(2)新しいプログラムの開発、(3)歴史的分析、(4)指導者養成、(5)評価

2.2 調査結果

2.2.1. 概要

“RESEARCH IN OUTDOOR EDUCATION: SUMMARIES OF DOCTORAL STUDIES”のVolume I (1973年版)、Volume II (1978年版)、Volume III (1983年版)に掲載された博士論文の抄録のうち、1930年から1979年までの論文は315編であった。1949年以前の論文は、1930年の2編、1943年の1編、1948年の1編、1949年の3編の計7編であるのに対して、1950年以降では、毎年1編以上の論文が認められた。年代別の論文数は、1949年以前は

7編, 1950年代は42編, 1960年代は62編, 1970年代は204編であった。

2.2.2. 年代別の動向

(1) 1949年以前の研究

1949年以前の論文における研究対象は, 学校キャンプ3, 組織キャンプ3, 野外教育1であった。また研究内容は, 評価3, 組織と管理2, 新しいプログラムの開発, 指導者養成それぞれ1であった。

(2) 1950年代の研究

1950年代の論文における研究対象は, 学校キャンプ26, 野外教育5, 自然保護教育5, 組織キャンプ3, 野外レクリエーション1, その他2であった。また研究内容は, 評価18, 新しいプログラムの開発10, 組織と管理8, 指導者養成5, 歴史的的分析1であった。

(3) 1960年代の研究

1960年代の論文における研究対象は, 野外教育18, 自然保護教育11, 学校キャンプ7, 組織キャンプ6, フィールド・トリップ5, 環境教育4, 人物3, 野外レクリエーション1, その他7であった。また研究内容は, 評価19, 指導者養成15, 新しいプログラムの開発11, 歴史的的分析10, 組織と管理7であった。

(4) 1970年代の研究

1970年代の論文における研究対象は, 環境教育69, 野外教育30, 組織キャンプ29, 冒険的教育14, OBS12, 野外レクリエーション12, 自然保護教育9, フィールド・トリップ7, 学校キャンプ3, 人物3, その他16であった。また研究内容は, 評価109, 新しいプログラムの開発38, 指導者養成32, 組織と管理18, 歴史的的分析7であった。

2.2.3. 研究対象別の動向

(1) 学校キャンプ

学校キャンプを研究対象とした論文は, 総計39編であった。

その研究内容は, 1949年以前では, 1943年の新しいプログラムの開発1, 1948年の評価1, 1949年の組織と管理1の計3であった。1950年代では, 評価11, 組織と管理8, 新しいプログラムの開発4, 指導者養成3であった。1960年代では, 評価3, 指導者養成2, 新しいプログラムの開発1, 歴史的的分析1であった。1970年代では, 評価3であった。

(2) 組織キャンプ

組織キャンプを研究対象とした論文は, 総計41編であった。

その研究内容は, 1949年以前では, 1930年の評価2, 1949年の組織と管理1の計3であった。1950年代では, 評価2, 組織と管理1であった。1960年代では, 評価3, 組織と管理2, 歴史的的分析1であった。1970年代では, 評価19, 組織と管理7, 指導者養成3であった。

(3) 野外教育

野外教育を研究対象とした論文は, 総計54編であった。

その研究内容は, 1949年以前では, 1949年の指導者養成1のみであった。1950年代では, 新しいプログラムの開発2, 指導者養成2, 歴史的的分析1であった。1960年代では, 指導者養成6, 組織と管理4, 新しいプログラムの開発3, 評価3, 歴史的的分析2であった。1970年代では, 評価14, 指導者養成8, 組織と管理4, 新しいプログラムの開発4であった。

(4) 自然保護教育

自然保護教育を研究対象とした論文は, 総計25編であり, 全て1950年代以降のものであった。

その研究内容は, 1950年代では, 評価3, 新しいプログラムの開発2であった。1960年代では, 指導者養成4, 評価3, 新しいプログラムの開発2であった。1970年代では, 新しいプロ

グラムの開発3, 歴史的分析3, 評価3, 指導者養成2であった。

(5) 野外レクリエーション

野外レクリエーションを研究対象とした論文は, 総計14編であり, 全て1950年代以降のものであった。

その研究内容は, 1950年代では, 1959年の評価1のみであった。1960年代では, 1969年代の評価1のみであった。1970年代では, 評価6, 組織と管理4, 歴史的分析1, 指導者養成1であった。

(6) フィールド・トリップ

フィールド・トリップを研究対象とした論文は, 総計12編であり, 全て1960年代以降のものであった。

その研究内容は, 1960年代では, 評価4, 指導者養成1であった。1970年代では, 評価6, 指導者養成1であった。

(7) 環境教育

環境教育を研究対象とした論文は, 総計73編であり, 全て1960年代以降のものであった。

その研究内容は, 1960年代では, 指導者養成3, 新しいプログラムの開発1であった。1970年代では, 評価30, 新しいプログラムの開発24, 指導者養成12, 組織と管理2, 歴史的分析1であった。

(8) 人物

人物を研究対象とした論文は, 総計6編であり, 全て1960年代以降のものであった。

その研究内容は, 1960年代では, 歴史的分析3であった。1970年代でも同様に, 歴史的分析3であった。

(9) OBS

OBSを研究対象とした論文は, 総計12編であり, 全て1970年代のものであった。

その研究内容は, 全てが評価であった。

(10) 冒険的教育

冒険的教育を研究対象とした論文は, 総計14編であり, 全て1970年代のものであった。

その研究内容は, 評価7, 新しいプログラムの開発3, 指導者養成2, 組織と管理1であった。

2.2.4. 調査のまとめ

以上の調査結果は, 次のようにまとめることができる。

(1) 論文数の年代別の推移をみると, 1950年代から増加傾向を示しており, 1970年代の論文数は, 全体の6割を占めている。また, 年代別の研究対象の推移をみると, 1950年代から多様化傾向を示している。

(2) 論文数が多い研究対象の年代別の推移をみると, 1950年代では学校キャンプ26編(62%), 1960年代では野外教育18編(29.1%), 次いで自然保護教育11編(17.8%), 1970年代では環境教育69編(33.8%), 次いで野外教育30編(14.8%), 組織キャンプ29編(14.3%), OBSと冒険的教育を合せて26編(12.6%)であった。

(3) 論文数が多い研究内容の, 年代別の推移をみると, 1950年代では評価18編(42.8%), 次いで新しいプログラムの開発10編(23.9%), 1960年代では評価19編(30.6%), 次いで指導者養成15編(24.1%), 1970年代では評価109編(53.4%), 次いで新しいプログラムの開発38編(18.7%), 指導者養成32編(15.6%)であった。

2.3 考察

(1) 1950年代の研究

1950年代の論文の研究対象として最も多いものは学校キャンプであった。また、1950年代の学校キャンプを研究対象とした論文の研究内容で最も多いものは、評価11編、次いで組織と管理8編であった。このような研究動向は次のような背景によるものと考えられる。

すなわち、1920年代までのキャンプは、野外における共同宿泊体験とレクリエーション活動を提供することを主な目的にしていた。しかし、1930年代からキャンプの教育的効果についての研究が行なわれるようになり⁹⁾、集団生活の体験によって得られる内面的発達を促す効果が着目され、キャンプが教育的活動としてとらえられ始めている。その後シャープが開催した指導者キャンプ等によって、キャンプの教育的価値の認識は次第に指導者層にも広がっている⁹⁾。

また、1950年代は反共教育体制が強まり、学校教育では知的エリート養成がその役割りとして次第に重視されるようになった。この傾向は、キャンプのプログラムにも少なからず影響を及ぼし、キャンプ場面においても、レクリエーション志向のプログラムに代って、各教科の学習内容を具体的にキャンプで実践するためのプログラムの開発が行なわれている。

(2) 1960年代の研究

1960年代の論文の研究対象として最も多いものは野外教育であり、次いで自然保護教育であった。野外教育を研究対象とした論文の研究内容で最も多いものは、指導者養成6編、次いで組織と管理4編であった。このような研究動向は次のような背景によるものと考えられる。

すなわち、野外教育は、1950年代から学校カリキュラムを豊富にする、野外（教室外）を利用した教育活動としてとらえられている¹⁰⁾。このことは、野外教育がキャンプという特定の条件が設定されなくても実施可能な教育方法として、学校教育に広く導入される要因となったと考えられる。また、1960年代には野外教育に関する専門書が数多く出版された¹¹⁾。これは、大学レベルにおいて野外教育に関する研究が盛んに行なわれるようになったため、大学における研究が野外教育の指導者養成課程を充実させることにもなり、全国レベルの野外教育指導者会議も開催されている¹²⁾。

また、1960年代は、自然資源の保護ならびに有効利用の啓発が全国規模でなされた時期でもあった。レイチェル・カーソンによる「沈黙の春」、スチュアート・ユードルによる「静かな危機」等の著作が、自然環境の誤用や荒廃を指摘し、自然環境に対する市民の意識高揚の口火を切り、自然への愛着や態度の育成が強調されるようになった¹³⁾。

(3) 1970年代の研究

1970年代の論文の研究対象として最も多いものは環境教育であり、次いで野外教育、組織キャンプ、OBSと冒険的教育を合せたものであった。環境教育を研究対象とした論文の研究内容で最も多いものは、評価30編、次いで新しいプログラムの開発24編であった。このような研究動向は次のような背景によるものと考えられる。

すなわち、自然保護教育は、主に自然環境を対象として、それらについての認識や理解を高めようとするものであり、一方環境教育は、自然環境の他に、エネルギー問題、都市問題、人種問題等の人間を取り巻くあらゆる環境を対象として、それらについての認識や理解を高めようとする学際的なものである¹⁴⁾。1960年代に芽生えた自然保護の意識は、自然資源の有効利用、環境汚染の防止の意識へと高まり、1969年の全国環境政策法に代表される法的規制を生み出した¹⁵⁾。また、1970年の環境教育法の制定に見られるように、教育にも環境問題解決のための役割りが課せられるようになった¹⁶⁾。

環境教育、野外教育に次いで、組織キャンプを研究対象として扱った論文が多いことは注目

に値する。1970年代の組織キャンプを研究対象とした論文の研究内容で最も多いものは、評価19編であった。この中には、障害者対象のキャンプについて研究を行なったものが多く、学校キャンプではカバーすることが難しい多様な形態の組織キャンプが実施されるようになった結果と考えられる。

また、組織キャンプに次いで多い冒険的教育は、1960年代にイギリスから伝えられたアウトワード・バウンドから派生したものとされるが、これは単に青少年の冒険心を満たすばかりではなく、集団で困難を克服する課程で、自然および人間との直接交渉による健全な市民の育成が意図されている¹⁷⁾。1970年代は、アメリカの青少年の暴力、非行が急激に増加した時代であり、このような背景が先進文明国の非冒険的な日常生活による冒険指向の高まりと相まって、その研究を増加させたものと推察される。

3. 結 論

1930年代から1979年までのアメリカの野外教育に関連する博士論文の抄録を対象に、研究の動向を調査・分析し、それぞれの時代の社会・教育的背景と照合・検討した結果、アメリカの野外教育は、時代の多様な要請に柔軟に対応しながら発展し、また、それらの要請に応じるための多様な角度からの研究がなされていると考えることができる。

参 考 文 献

- 1) 今村嘉雄, 宮畑虎彦 (編), 新修体育大辞典, 不昧堂出版, 1976. pp.1488-89.
- 2) 星野敏男「アメリカにおける野外教育の歴史と展望」レクリエーション研究, 16:68, 1986.
- 3) 前掲書 2). p.66.
- 4) Hammerman, D.R., Stark, W.D., Swan, M.D., RESEARCH IN OUTDOOR EDUCATION: SUMMARIES OF DOCTORAL STUDIES, AAHPER, 1973. Pp.173.
- 5) Hammerman, D.R., Lewis, C., Stark, W.D., Swan, M.D., RESEARCH IN OUTDOOR EDUCATION: SUMMARIES OF DOCTORAL STUDIES, AAPERD, 1978. Pp.121.
- 6) Hammerman, D.R., Lewis, C., Stark, W.D., Swan, M.D., RESEARCH IN OUTDOOR EDUCATION: SUMMARIES OF DOCTORAL STUDIES, AAPERD, 1983. Pp.115.
- 7) 前掲書 6). p.i.
- 8) 菊池秀夫, 「アメリカにおける野外教育の発展」江橋慎四郎 (編), 野外教育の理論と実際, 杏林書院, 1987. pp.31-32.
- 9) 黒木保博, 「アメリカにおける野外教育の現状」石田裕一朗・斎藤保夫 (編), 現代野外教育概論, 海声社, 1986. p.199.
- 10) 前掲書 8). pp.34-35.
- 11) 前掲書 8). p.35.
- 12) 前掲書 9). pp.200-01.
- 13) 前掲書 8). p.36-37.
- 14) 前掲書 2). p.62.
- 15) 斎藤真, アメリカ現代史, 山川出版社, 1985. p.317.
- 16) 前掲書 9). p.202.
- 17) 東原昌郎「海外の野外教育」学校体育, 33-10:48-54, 1980.

A Study on Trend of Outdoor Education Studies in America

Masuyuki MIYAMOTO and Masao TSUKAHARA

Department of Health and Physical Education

Synopsis

The purpose of this study was to find the relationship between the trend of studies on Outdoor Education and the social and educational background in America.

As the research procedure, 315 doctoral studies reported from 1930s to 1980s and printed in AAHPER (AAPERD)'s "RESEARCH IN OUTDOOR EDUCATION: SUMMARIES OF DOCTORAL STUDIES" were investigated.

As the result of the study, the followings were found.

1. Studies on outdoor education increased in number rapidly in 1970s.
2. The major activities took up were; outdoor education and conservation education in 1960s, and, environmental education, outdoor education and organized camp in 1970s.
3. The major items took up were; evaluation and education for leaders in 1960s, and, evaluation and program development in 1970s.
4. The major activities and items took up changed flexibly according to social and educational demand of respective stage.

